

日本人と漢字

笹原宏之・著

集英社インターナショナル

ウェブ立ち読み

もくじ

第一章 変化し続ける漢字 5

漢字クイズからは学べないこと／エビという字の変遷
漢字にも地域差がある／ことばは変化するという現実を見よう

第二章 中国での漢字の誕生と変遷 17

文字の誕生／甲骨文字の歴史／漢字から見える三千年前の中国
殷の時代／周の時代／漢字の伝播―韓国

漢字の伝播―ベトナム／春秋・戦国時代

秦の時代／道教の広まりと漢字

漢―仏教の伝来と漢字／サンスクリット語の漢訳

書体の変化／日本語に残る、サンスクリット語の影響

壮大なる仏教漢字／三国、六朝時代

科挙／唐詩／「上書き保存」の中国／科挙から生まれたもの

第三章 日本の漢字の変化と多様性 77

日本語の多様性／日本語の歴史／訓読みの始まり

音読み／仮名の誕生／表記の多様性／意味を大事にする

漢字政策／当用漢字／常用漢字

人名用漢字／JIS漢字／幽霊漢字

日本の漢字の特徴／字体／広がる多様性

第四章 日本人による漢字への思い入れと手入れ 121

コノテーション／見立て／日・中・韓の違い／「恨」と「怨」

中国の漢字の現在／漢字に対するイメージ

魚偏の漢字／当て字は乱れ？／位相文字／方言漢字

閑／子供の名付け／抜き漢字／漢字は禁断の果実だった

第一章

変化し続ける漢字

漢字クイズからは学べないこと

ここ何年もの間、〃漢字ブーム〃が続いています。テレビでは連日、著名人たちが漢字の読み書きの力を競うクイズ番組が放送されています。漢字をネタに日本人の心を捉えて笑いをとる、アメリカ出身の芸人、厚切りジェイソンも人気です。小学生の頃から漢字に興味を抱いて、漢字にまつわる調査研究を続けてきた私にとって、たくさんの人が漢字に関心を向けるこの状況は気にかかるものであります。

テレビ局から私に、クイズ番組への出演依頼が来ることも時々あるのです。「漢字王と呼ばれる〇〇さんと対決してください」とか、「漢字対決の審査員になってください」とかです。ありがたいオファーなのかもしれませんが、近頃は、とてもそんなことはできませんとお断りしています。

というのは、テレビに出るなんて、という気持ちとともに、私は漢字ブームに対して、物足りない思いを抱いているのです。辞書に載っているような漢字の知識を暗記し、披露するだけの、表面的な流行のように感じられるからです。これだけ多くの人が漢字に興味を持っているのに、その興味は、辞書が教えてくれること、そして、それらを覚えることに留まっている。それがとてももったいないと考えているのです。

辞書でわかることは、漢字に関する複雑な事実のうちの一部分にすぎません。

蝦 鰕

この本で私が最も伝えたいことは、「漢字は変化する」ということです。これまでの長い歴史のなかで漢字は変化し続けてきたし、いまなお変化を止めていません。そして変化の背後には、変化を引き起こす、さまざまな心理的・社会的・歴史的要因が存在しています。

では、実際にどう変化しているのか。それはこの本全体を通して伝えていきたい大きなテーマですが、まずこの章では海や川に棲む「エビ」を例にとつて、具体的に見ていきたいと思います。

概して日本人はエビが大好きです。世界でトップクラスの消費量を誇ります。おせち料理に使われるなど、めでたい食材としてありがたがり、好んで食べているわけですが、そんなエビを表す漢字は複雑な変化を遂げてきました。

古代の中国では、エビは日本語に直していうと「カ」のように発音され、「鰕」という字が使われていました。右側の旁の部分つくりが「カ」と発音する漢字です。そもそも、なぜエビが「カ」と呼ばれていたのかについては諸説あつて、解釈が定まっておりません。一つを紹介すると、エビの殻があたかも仮面をかぶっているようだから、その仮（旧字体では假）の「カ」をとつたとされます。なるほど、と思わせられる説ではありませんね。

今、中華料理のエビのチリソースを表記する際などに、魚偏うおへんが虫偏むしへんに変化した「蝦シエ」が使われています。そして現代の中国では、エビの漢字は「虾」になっています。「カ」と

いう発音を少ない画数で表すために、^{つくり} 旁の部分「下」に変化したのです。

では日本において「エビ」の漢字は、どのような変化を遂げてきたのでしょうか。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に、この「鰕」が登場します。「海鼠（なまこ）、鰕鰕、海松（みる）」とある文の中に出てくるため、大エビを表す漢字と合わせた「鰕鰕」という二文字で、エビと読んでいたと考えられています。こういうところから、古代の日本では、中国から伝わった漢字をそのまま使っていた人たちがいたことがわかります。日本人は中国の漢字を、とても大切に受け入れたといえるでしょう。

と同時に、日本人には、少しでも自分たちの考えや感性に合うように物事に対して改良を重ねていくという側面もありました。現代のわれわれから見ると驚くほど自由かつ大胆に、漢字も改良を重ねていったのです。

日本人は、海外から受け入れたものを改善したり、柔軟に変えたりしていくのが得意だといわれます。漢字においてもそうした特性はいかなく発揮されているのです。

エビという字の変遷

では日本人は「鰕」をどう変えていったのでしょうか。

中国からエビを表す漢字「鰕」や「蝦」が伝わったものの、日本人には、右側の旁の部分の意味がわかりにくかったようです。また、中国人であればこれは「カ」と読めるので

すが、日本人はそうに簡単に読んで意味を理解することができませんでした。しかも「カ」という音読みが、大和言葉で日本人が発音してきた「エビ」から、かけ離れていて結びつけづらい。そこで、エビにふさわしい漢字をなんとかして見つけだそうとします。

日本人は奈良時代以前から、エビに対して、あるイメージを抱いていたようです。それは「海の翁」^{おきな}——海のおじいさんです。ひげのような触角が長く伸びていて、背中の部分が曲がっている。そんな見た目が、おじいさんを彷彿とさせたのでしょう。このイメージをもとにつくった漢字表記が、現在まで使われている「海老」です。平城京遺跡から出土した木簡には、すでに「海老」という文字がいくつも見つかっています。エビ⇨おじいさん⇨長寿というイメージがあつた。ゆえに、エビはおめでたい食べ物として、おせち料理の定番となっているんですね。

つまり日本人は、もともと自分たちが持っていた「海の翁」というイメージに沿う表記を探求して、その結果が社会全体へと広まっていったわけです。

中国人は、「音」をもとに漢字をつくらうとする傾向が強く見られました。一方日本人は、「意味」を大切にして漢字をつくる傾向をもっていたのです。これは中国と日本の漢字において、大きく異なる点です。

平安時代になると、エビは一つの単語なのだから、二文字ではなく、一文字で書きたいという意識が強く芽生えてきたようです。そして、エビはお腹の部分が長い生き物だと感

蜚 蜚 蜚

じられたことから、「蜚」という字が一部で流行りました。地名などにも使われるようになり、当時の文献などに残っています。

鎌倉・室町と時代が下ると、さらなる改良が加えられていきます。海の翁という古来の見方を活かして、虫偏に老人を意味する「耆」——伯耆^{ほうき}国の耆ですね——を合わせ、「蜚」という和製の漢字が登場します。この字は、漢字を学習するための教科書であつた「識字書」に記されて残っています。

そして江戸時代になると、この漢字が変形していきます。「耆」が、一般的にあまり使われない、馴染みの薄い漢字だったこともあり、「日」の部分が余計だと思われてしまつたようなのです。「老」だけのほうが理解しやすい、という人々が台頭してきたのでしょう。その結果、今も使われている「蜚」という漢字が広まりました。江戸時代には漢字が書ける人、読める人が、庶民にも格段に増えたことも、「蜚」の普及を後押ししました。

ここまで簡単にエビの歴史を追ってきました。日本人は最適な漢字を探し求め、もし見つからなければ自分たちの手でつくってしまおうという気持ちで、漢字と向き合ってきたことをご理解いただけたと思います。

ちなみに「蜚」は、日本人が独自につくった漢字であり、「国字」と呼ばれています。私は漢字のなかでもとくに、この「国字」を一番の専門にしています。

漢字にも地域差がある

江戸時代につくられた「蛭」ですが、この漢字は主に、東日本で使われてきました。使用範囲は、西は尾張地方辺りまでだったのです。たとえば江戸時代の文書には「蛭江村」という地名が残っています。これは越後国の地名です。それから北海道にも「蛭谷^{えびや}」があります。現在でも「蛭」のついた地名は西日本には稀で東日本に広く見られ、青森には「蛭沢」という土地に建てられた「蛭沢小学校」が存在します。

つまり、方言のように、特定の地域だけで使われる地方漢字、つまり「方言漢字」とよびうる漢字があります。

面白いことに、北海道では現在でも、この「蛭」を、地名のみならず、ボタンエビやシマエビなど、普通名詞のエビを表記する際にも使うことがあります。二十年ほど前、留学生を引率して北海道に行ったときに、室蘭あたりのレストランで「蛭」の字を見かけたときから、私は心に引っかかっていました。その後、調べてみるとやはり道内では、スーパーや寿司屋でも、「蛭」の字が当たり前のように使われていたのです。エビフライまで「蛭フライ」と書くほどです。そうした環境に暮らす北海道の方々には、「蛭」に違和感を持つことがほとんどないわけです。

こうした地方独特の漢字、方言漢字は、他にもたくさんあります。暮らしのなかで脈々

と継承されていくこのような漢字は、日本の多彩な文字文化の一つとして捉えることができるでしょう。

さらに現代では、地域のみならず、「社会的な集団」によって、使用する漢字や、漢字の使用傾向が異なるという現象が見られます。ことばに当てはめていえば、「若者言葉」「業界用語」「コンビニ敬語」といわれるものなどが相当します。これらは、日本語学や社会言語学などの研究領域では、「集団語」あるいは「位相語」などと呼ばれます。

ことばに「集団語」「位相語」があるように、漢字にもやはり「集団漢字」「位相漢字」があるということを、各社会の文献などのほか、日々の生活で目にするもの、そして講義・演習のなかで学生たちからも教えてもらうことがあります。

十年ほど前に、日本各地の大学で、「**蛭**」を何と読みますか」という簡単なアンケートをとりました。「**蛭**」は常用漢字ではありませんから、学校で習うことはありません。どうしてそう読むと思ったのか、ということも書いてくださいとお願ひしました。すると意外なことがわかったのです。「**蛭**」を「**エビ**」と読める学生は、男子よりも女子、そして共学生よりも東京のキャンパスに通う女子の短大生に多かった。読み方を知った主なきっかけは、人気モデルの蛭原友里さんだったのです。

私がアンケートをとった当時、蛭原さんは、人気のファッション雑誌『CanCam』などの表紙を飾り、エビちゃんブームを巻き起こしていました。エビちゃんが雑誌やCM

で着る服は、次々に大ヒットするという「エビちゃん効果」を生み出していたのです。その効果は、経済のみならず、漢字にまで及んでいたといえるでしょう。ファッションに興味のある女子大生にとっては、馴染みの深い漢字だったというわけです。雑誌やテレビといったマスメディアが教科書代わりとなつて、日本中に情報を均等に、瞬時に伝達するという極めて現代的な現象も、ここでは見逃すことができません。

ちなみに蛭原さんは、宮崎県のご出身です。関東一帯で使われていたという「蛭」が、なぜ遠く九州は宮崎県の名字になっているのか、疑問に思われた方もいるかもしれません。実は、江戸時代に東日本から宮崎の地に移住した人々に、「蛭原（海老原）」氏がいて、宮崎で庄屋になつたことが歴史的に明らかになっています。

一方、男子学生では、少数ではありますが、競馬を趣味とする学生のなかにも、「蛭」を読める人がいました。競馬のジョッキーに蛭名正義さんがおいでになるからでした。ちなみに彼はやはり北海道のご出身です。

このように現代では、学校での漢字教育とはまったく別に、趣味や嗜好というものが漢字の理解に深い影響を及ぼしていることがわかります。日本の漢字というのは極めて多層的です。裏を返せば、日本社会が、多彩な文化をもつ様々な文字社会から成り立っているともいえるでしょう。

ことばは変化するという現実を見よう

最近、「日本語の乱れ」、ということがしばしば指摘されます。しかし、エビという漢字表記一つをとってみても、様々に変化を繰り返してきた歴史があります。地域や位相つまり集団や場面による特色も見られます。正しい・間違っているといった価値判断とは別の次元で、ことばの変異は、確かに社会に存在しているのです。変異形が一般化することもあるのです。

日本語が乱れていると批判するのは、案外たやすいことです。そうする前に一度、なぜ変異が発生したのか、その背景にはどんな理由があるのか、「なぜ」と問いかけてみましょう。そこから見えてくるものが必ずあると思っています。

かくいう私にも、変化や変異を受け止められなかった苦い経験があります。

一九七七年に、山口百恵さんの「秋桜^{コスモス}」という歌がリリースされました。多くの歌手にカバーされている曲なので、リリース時に生まれていなかった若い方でも、ご存じの方は多いようですね。山口百恵さんが哀愁漂う美しい声で、娘から母への切々たる思いを、一度聴いたら忘れられないメロディーに乗せて歌い上げた。作詞作曲はさだまさしさんで、大ヒットしました。

このとき私は中学生でした。すでに漢字が面白くなっていて、十冊くらいの国語辞典や

漢和辞典から外来語や外国地名、人名に対する当て字を集めていたんです。しかし、その中に「秋桜Ⅱコスモス」という読み方は、どの辞書を探しても載っていなかったのです。

「秋桜」を「コスモス」と読ませる当て字は、あの曲が発端だったのです。この二字には、「あきざくら」や「シユウオウ」という読み方が、それ以前からコスモスの意で存在していました。ただ、あの曲でいきなり「コスモス」と読ませたんですね。

私はもう、許せなくなりました。勝手に当て字をつくるなんて！　これが音楽プロデューサーの酒井政利さんの発案だったと知るのは、だいぶ後のことです。

一人怒っている私をよそに、世間ではあつという間にコスモスという当て字が広がって、以前からあったかのように語られる、当たり前前の読み方になったのです。ほどなく国語辞典にも載りました。

結局のところ、私の怒りを生み出していたのは、「辞書こそが正しい」という思いでした。漢字が好きで、辞書ばかり読んでいた私は、辞書のなかにこそが唯一の正解があるはずだと信じて疑わなかったのです。

しかし、それは真実でしょうか。

現実のことばの動きを、後追いしながら写し取っているのが辞書です。その現実のことばというのは、変化する社会の中で生きている我々が使っているわけですから、当然、変化していきます。変化していく過程で、日本人が必要と感じ、その心を捉えたことばが広

がり、残り、そして辞書もそれを拾い上げ、後世へと受け継がれていくのです。ですから、辞書に載っている漢字を覚えることはもちろん大事だし、楽しいことなのだけれど、現実の変化にも目を向け、その経緯や原因を知ること、同じくらい、あるいはそれ以上に大事だし、楽しいことなのです。個人が生み出し、小さな社会で使われて変異となる。しつくりくる人が多かったり、必要なものだったりすれば皆が使うようになっていくのです。私は今、辞書の編者としても、そうした動態を常に忘れないように心がけています。

われわれが変わるからこそ、ことばも漢字も変わっていく。それは我々が生きている証でもあります。変化が止まってしまえば、漢字は、たとえば古代エジプトのヒエログリフのように、古代文字になってしまおうでしょう。そしてこの変化は、自分以外の誰かが引き起こしてくれるものではありません。私たち一人ひとりが社会のなかで必要に応じて変化を生み出し、一つひとつの場面で最適なものを取捨選択しているという自覚が大切です。

「秋桜」が教えてくれることは、たくさんあるのです。

日本人と漢字
笹原宏之・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：1,100 円（本体）＋税
発売日：2015 年 11 月 26 日
ISBN：978-4-7976-7307-4 C0081

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)